

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

戦時下出版メディアの諸相（二）： 山海堂と雑誌『報道』、大東研究所

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): SANKAIDO, DAITO KENKYUJYO, printing media during wartime 作成者: 掛野, 剛史 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/182

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



戦時下出版メディアの諸相（二）

― 山海堂と雑誌『報道』、大東研究所 ―

掛野 剛史

一、はじめに

戦時下に存在した出版統制団体、日本出版会は昭和二〇年一月一〇日解散し、同日新たに日本出版協会が誕生した。だが、限られた用紙の割当をめぐる不満は渦巻き、翌年一月二四日、日本出版協会臨時総会において民主主義出版同志会の人民社佐和慶太郎から出版界粛清の緊急動議が出されるに至る。これは戦争協力出版社とする七社を即時に除名して、用紙の再分配を求めたもので、一端は可決されたものの、最終的には「出版粛清委員会」が設置され、そこでの審議に付されることになった。ここで「戦犯出版社」として名指しされたのが講談社（大日本雄弁会講談社）、主婦之友社、日本社（興亜日本社）、第一公論社、家の光協会、旺文社、そして本稿で取り上げる山海堂の七社である。二五日には粛清委員会が開かれ、以後七社に対する審議がなされることになった。

最終的にこうした動きに不満を持つ大日本雄弁会講談社、主婦之友社、旺文社など二一社¹⁾が日本出版協会を脱退して、四月には

日本自由出版協会という新団体を設立し、対立を強めていったことはよく知られているが、それぞれの出版社の何が「戦犯」に該当し、それにどう対処したのだろうか。

山中恒『少国民戦争文化史』（辺境社、平成二五年一〇月）の中には昭和二一年六月六日付けの文書『マル秘／出版界粛清報告書（第一）』一六頁が紹介されている。孫引きになるが、ここから山海堂についての報告を抜き出してみると、山海堂の「罪状」は次のようになる。

山海堂の社長「来島氏は戦時中陸軍機甲本部の軍属となり、軍の指導の下に機械化国防協会編輯に係る雑誌「機械化」の発行を担当し、又陸軍報道部編輯の雑誌「報道」を担当して専ら軍国主義の宣伝に努めた」。このことは「一、軍より直接に用紙の配給を受けた」こと。「二、軍の指示により用紙の特別助成を受けた」こと。「三、情報局其の他の官庁の指示により用紙の特配助成を受けた」ことなどに該当し、「一、戦争協力の度合、二、軍官との結びつきの度合」は大きく、「戦争責任者の定義」たる「軍国主義、超国家主義の活動を顕著になせる出版事業体」と「軍官と結び戦

争を利潤の具となせる出版事業体」と認定できる。

出版粛清委員会は二月二三日各出版社にそれぞれの勧告を決定通達しているが、山海堂には先の「罪状」に基づき「来島同族の参加は資本の面に限るものとし、出版部門を理工学部門に限定すること」という勧告を下している。決定に至るまでの委員会には各出版社からも代表者が出席し、弁明を行い、山海堂からは二月一二日に前社長の来島捨六、社長の原田喜代子、常務取締役の来島明太郎が出席している。そこでどのようなやり取りがなされたかは不明であるが、ただ二月一日の『日本読書新聞』に山海堂の弁明として次のような記事が出ているので、おおよそを推測することは可能である。山海堂の言い分はこうである。

終戦後山海堂は徹底的な自己審判をやつて幹部は勿論、編輯陣も一変してしまつた、事業体そのものも個人会社より株式へ転じ、現在では編輯員が丸となつて民主的出版に努力してゐる、戦時中の雑誌「報道」「機械化」等は終戦と同時に廃刊した、これら雑誌が軍から紙の特配を受けたことは事実だ、しかしそれによつて暴利をむさぼつたやうなことは全く無い、これは倉庫や帳簿を見て頂くならよくわかる、むしろ戦時中ずっと赤字だつた、現在出してゐるのは「科学の友」だけである、粛清委員会も結構だが我社は何が犯罪人だかよくわからない、しかし今弁明すれば誤解を招く懼れがあるから、山海堂としては黙つてゐるよりほかはない。

「粛清委員会も結構だが我社は何が犯罪人だかよくわからない」

という箇所には、素直な戸惑いが現れているようで面白いが、結局山海堂はこの後も活動を続け、平成一九年に倒産するまで長い歴史を誇つた。だが出版粛清委員会で指摘された山海堂の戦時下の出版活動の具体的な実相はいかなるものであつたのか。軍と密接な協力関係にあつたという外形的な輪郭は浮かび上がるが、ではどのような協力関係で、どのような内容の出版物を送り出したのだろうか。無論当時は自明のことであるが、現在、改めてそれを跡付けながら再検討しようとするとは意外に容易ではない。出版粛清委員会は第二回の対象として新潮社以下一〇社を選ぶが、その中に名前がある日本報道社についても同じことがいえる。

以前、この日本報道社について、講談社との関係に触れながら、発行していた『征旗』の目録および内容分析とともに、詳細に考察したことがある。⁴¹その際にも念頭にあつたことだが、戦時下のメディアおよび文学を研究するためには基礎資料の整備が不可欠なのは言を俟たず、さまざまな試みが行われているが、未だ完全とはいえない状況である。名前は聞くが実態が不明な雑誌や、名前すらほとんど目にするこない雑誌などは多い。

山海堂についても、たとえば『報道』という雑誌が軍の影響下にあつたことはわかるが、実はその編集主体は大東研究所なる団体であつた。この団体がいかなるもので、『報道』の全容はいかなるものだったのか。『報道』についてはこれまでほとんど注目されなかった。唯一といつてよい言及は、櫻本富雄『少国民は忘れない』（マルジュ社、昭和五七年十一月）の中で、『報道』三十一号に秋谷豊の詩が掲載されていることに触れているものであ

る。ただそこでは戦時下の隠された詩の存在を明らかにすることに力点が置かれており、雑誌自体の位置づけやその考察を指摘されてはいない。そもそもこの雑誌を全冊を所蔵している機関は存在せず、国会図書館でも全三八冊と思われるところ一三冊しか所蔵していない。各地の公共機関においても欠号が目立ち、それらすべてをあわせても全冊を見ることはできない雑誌となっている。今回、三八冊中三七冊について確認できたこともあり、まずはその全容を資料として提示し、『報道』の展開と山海堂、大東研究所の戦時下の活動についての見取り図を描いてみたい。小さな図ではあるが、こうした積み重ねが全体の大きな図につながるはずである。

二、山海堂と大東研究所

山海堂の創業者、来島正時は安政六年、福島生まれ。慶応義塾に学び、時事新報記者や文部省勤務を経て、古本業を営む。その後の明治二九年に山海堂を創業した。⁴⁵主に学習参考書や教科書の類を主に刊行し、大きな出版社に成長した。来島正時は昭和二〇年一月八日に没したが、それ以前に息子の来島捨六が実質的な社主となっており、刊行書の奥付によれば、昭和一〇年六月から七月の間に発行人が来島正時から来島捨六に変更になっている。

明治四〇年生まれ、来島捨六に経営の実権が移って以降、二つの雑誌が創刊されている。『内燃機関』が昭和一二年九月の創刊、『機械化』が昭和一五年五月の創刊であり、この二誌は当時工業図書出版に乗り出していた山海堂の中心的存在になった。

『内燃機関』は東京帝大名誉教授の加茂正雄を主宰として創刊

され、編集として富塚清、隈部一雄ほか研究者一六名の名前が列挙されている。判型はB5版とやや大きめで、広告や写真などが多く、それらにはグラビヤ紙、アート紙が使われている。学界、産業界が一体となって「内燃機関を中心としたる工学綜合雑誌」(創刊号「編輯後記」)として世に送り出された雑誌である。山海堂にとってもはじめての定期刊行物であった。⁴⁶部数は昭和一四年段階では五八〇〇部で、広告代収入が全体の三割を占めていた。⁴⁷

創刊号の編集後記には「非常時局に直面したる日本工業界の発展の為、何等かの貢献を致し度い」(『内燃機関』創刊号編輯後記)とも記されていたように、折しも勃発した日中の衝突とそれに引き続く全面対決の時局に誌面も強く影響を受けていく。「我軍爆撃敢行のニュース毎に云ひ知れぬ喜びと、誇りが感ぜられるのは吾々内燃機関関係者の役得でありませう」(二号「編輯後記」)「戦火の真只中に産声を挙げ皇軍大勝利の歓呼の中に本誌も戦勝の本年を終らんとして居ます」(四号「編輯後記」)といった具合で、この後さらに戦局が深まる時局の影響を直接被るのは必定だった。昭和一六年三月号の巻頭言を当時陸軍大臣だった東條英機が書いていることに象徴されるように、軍人の寄稿も増え、産学と軍が一体となって誌面は展開していく。昭和一九年八月、日本出版会から「企画力旺盛にして成績優秀なるもの十一誌」の一つに選ばれ、「尚一段と出版報国の実を挙げるべく」八月一日に各誌の編集長は日本出版会に集合し、臨時の用紙の特別配給を受けることになるなど、時局にふさわしい雑誌として存在感を示す。雑誌統合に備えてか、昭和一五年一一月号から『日本航空新聞』『日本溶接新聞』『学園の友』を統合して『内燃機関』として引き続

き存続させるような出来事もあった。確認できた最終号は、八巻一一号（昭和一九年一〇月十一月合併号）で、広告ページが大幅に減ったため全体としては薄くなっているが、本文に限れば九五頁であり、創刊号の本文八三頁と全く変わらなかった。

もう一つの雑誌『機械化』は、軍との一体化がより如実に現れている雑誌である。終刊は確認できていないが、実見できた最終号は昭和一九年一二月号である。「国防科学雑誌」と銘打たれたこの雑誌は、編集は機械化国防協会が担当し、山海堂は発行所という形をとり、編輯人は一貫して国防協会の理事が務めている。

このように山海堂の外部団体が全面的に編集にかかわる形は『内燃機関』とは異なるが、後に見る『報道』と同様である。国防協会なる団体は会長が陸軍大将の吉田豊彦で、彼を含む七名の常務理事のうち、陸軍出身者が五名を占めており、陸軍の外郭団体ともいえるべき存在である。そして『内燃機関』と『機械化』の「編輯後記」を追っていくと、『機械化』の編集にあたったのは、社長の来島捨六以外は皆国防協会の人間、それも陸軍出身者であることが推定できる¹²。というよりもこうした状況を見れば、来島自身が軍関係者であり「戦時中陸軍機甲本部の軍属となり」という前節で引用した文の内容を証だしているだろう。

創刊号の定価は三五銭で判型はB5版。編集内容は『内燃機関』よりも専門性は薄く一般に向けられ、年齢も青少年向けになっている。中尾進や小松崎茂などによる表紙口絵などもよりそうした読者の興味をそそったことだろう。「機械化小説」とされた長篇小説は順に北村小松、南洋一郎、北村小松、蘭郁二郎、山中峯太郎が担当、短篇小説では伊藤永之介（昭和一九年二月）、里村欣

三（昭和一八年九月）、詩では高村光太郎（昭和一九年四月）が登場している。

陸軍関係者、とくに報道部関係者の誌面への登場は数多く、また戦局が悪化するにつれ陸軍少年兵への露骨な広告的記事が目立つようになる。「撃ちてしまむ」の語が表紙ほかに入った三月一〇日の陸軍記念日にあわせた昭和一九年三月号には、グラビアページには陸軍少年飛行兵の日常訓練風景写真が載り、大きく「僕の兄さんはアツツ島で玉砕した。兄さんの仇は僕が空からきつと打つ！」とキャプションが入り、「さあ君達も続け！ 陸軍少年飛行兵には、真面目に勉強してゐる、元気な日本の少年なら誰にでもなれる」の煽り文句で終わる「僕等は元気な操縦生徒」という記事がある。編集後記も徐々に絶叫調へと変わり、アメリカのサイパン上陸後の昭和一九年七月号の「編輯後記」は「打ち砕け頑敵！ 断ち切らん醜敵！」と結ばれる。

以上のような『内燃機関』『機械化』の編集刊行を通して、山海堂と陸軍関係者との太いつながりが出来たはずで、この延長上に大東研究所編集、山海堂発行の『報道』があるのだろう。

『報道』は昭和一八年七月一日付で刊行された。後述するように、この時は雑誌ではなく叢書としての刊行であった。発行の詳細書誌は別表一に譲るが、編輯人として最後まで名前がある大東研究所代表の「大熊武雄」とはいかなる人物なのか。彼は一貫して『報道』の編集人として存在し続け、「時言」という巻頭言にあたる欄も無署名のものも含めてほとんどが彼の手になるものと推定できる¹³。重要な人物である。彼の来歴と活動の詳細を明らかにすることは、大東研究所と『報道』を考える上では欠かせない。そして彼の歩

んだ道筋を跡付けて眺めてみた時、当時の言論人の時局との関わりにおけるある種の一典型とでもいえるコースを示していると感じてしまうのである。とはいえその全容を完全に明らかにすることは現在のところできておらず、直接的な一次資料などの類も持ち合わせていないのだが、現在までの調査で判明したその履歴を跡付けてみる。

大熊武雄は明治三十八年四月二十九日に生まれ、出身は東京市¹⁴。中央大学予科を経て、大正一三年東京外国語学校支那語部文科に入¹⁶学。昭和二年三月同校卒業¹⁷。同校では剣道部に所属した¹⁸。東京日日新聞社に入社。政治部に属し、外務省担当の霞クラブや陸軍省担当の記者クラブ「辛酉倶楽部」(のちに「陸軍省記者倶楽部」と改称)で活躍する²¹。その間の昭和六年一月には社からジュネーブに出張している²²。昭和八年一月、当時の社長城戸元亮を巡る社内騒動が起きた時には、城戸と連袂退社した²³。その後、昭和九年一月から昭和一〇年一月までの間に読売新聞に移り、再び政治部で「陸軍省記者倶楽部」に属して活躍。林銑十郎内閣の解散を巡る「政府議会解散に決定」(昭和二年三月三十一日)の記事で花見達二と共に社長賞を受けている²⁵。この新聞記者時代に陸軍関係者と親しくなったようで、陸軍中佐大久保弘一の著書『赤色支那』の「序言」には「本書の編纂執筆等は(略)読売新聞社政治部大熊武雄君の絶大なる助力」によったとの謝辞がある。その後、昭和一四年二月、陸軍情報部の全面的支援の下、宣伝情報機関として元大阪毎日新聞社長の城戸元亮を所長に大東研究所が創設される。この「大東研究所」は、当時海軍大佐だった高木惣吉の日記(昭和一四年二月六日)に次のように名前が登場し、そ

の設立背景の一端を垣間見ることができる。

陸軍ニテハ山王ビルニ大東研究所ヲ創設セリ。城戸元亮(四、五百円位貰フラシイ)其ノ他新聞関係者、文化関係者四、五名ヲ集メ、陸軍情報部ノ宣伝ノ補助機関タラシメ、文化的宣伝ヲ行ハントスル意嚮ナルガ如シ²⁷

以降はこの陸軍情報部の別動隊ともいうべき大東研究所という民間機関に所属し、なおかつ陸軍省囑託という肩書で活動することになる²⁸。最初にその肩書で執筆したものは、昭和一四年一月号の『外交時報』への「第二次欧州大戦走馬燈」で、同誌には昭和一五年一月号にも「戦争と宣伝戦」を執筆し、宣伝戦争ともいうべき宣伝の戦争遂行上の重要性を説き、一大宣伝機関の設置を訴えている。

その後、陸軍省情報部による国内外への宣伝と統制プランの策定と実行に関わり、内部文書として作成したものととして「言論の重要性と各種宣伝機関の現状(新聞、雑誌、映画、放送)」(昭和一五年六月二十六日付)、「新聞統制私案断片」(昭和一五年一月五日付)が残っており、新聞を統制して宣伝に利用するための具体的な統制策を提言している。

こうした陸軍情報部との関わりでいえば、情報官鈴木庫三との結びつきは特に強く、彼の著書『世界再建と国防国家』(朝日新聞社、昭和一五年一月)は、大熊武雄と彼と同じ大東研究所員だった阿部仁三によって書かれたことが同書の序文に明記されている。

また佐藤卓己『言論統制』（中公新書、平成一六年八月）に紹介される「鈴木庫三日記」中にも、昭和一五年二月二〇日、五月二一日、九月二〇日、九月三〇日に登場しているなどその親密さがうかがえる。昭和一六年三月、講談社に城戸元亮以下一名の顧問が鈴木庫三の圧力により迎えられることになるが、そこに大熊も名を連ねているのもこうしたつながりの中で理解できよう。

一方で同時期には『文芸世紀』の同人としても名前を連ねている。昭和一六年一月『文芸世紀』（三巻一号）の中河与一「編輯後記」には「今月号から同人を決定した。みな決意ある人々である」として二三名が列記されているが、五名の名前が○で区切られ最初に置かれている。その五名は中河与一、萩原朔太郎、藤沢親雄、齋藤响、そして大熊武雄である。文芸世紀の同人の変動はあるが、大熊武雄は一貫して同人であった。

昭和一六年六月から七月にかけては軍の手配により上海、南京、北京から満州を廻る旅に出かけ、現地で畑俊六などと会見している。³⁰

また昭和一七年一二月二三日に情報局の下に社団法人として設立された大日本言論報国会は、井沢弘、野村重臣、齋藤响といった日本世紀社のグループが中心となって設立されているが、ここでは評議員として中河与一、尾崎士郎、花見達二らとともに名を連ねていた。³¹

こうした彼の具体的な言論活動については、別表二の著作一覧を参照してほしいが、陸軍の影響が強い『新若人』や『征旗』『公論』といった雑誌に書く一方で『婦人画報』や『ユーモアクラブ（明朗）』といった一般誌にも大衆向けの啓蒙文章を書くなど、宣

伝広報活動に勤しんでいたことが明らかになる。この活動の延長上に、彼が思う存分筆を揮うことができた場所として『報道』の存在はある。

『報道』の実態については次節で詳しく述べるとして、確認できる最終号の昭和二〇年二月一五日号まで一貫して編集人として奥付に名前がある。終戦の玉音放送は陸軍関係者と報道部の将校室で聞いている。³²

戦後は公職追放には該当しなかったようで、『公職追放に関する覚書該当者名簿』（日比谷政経会、昭和二四年二月）には名前がない。そして米沢織物工業株式会社総務部長、新亜細亜通信社事務局長を経て、昭和二八年一月から昭和三〇年一〇月までの間は、昭和二六年に設立されたラジオ東京総務部長を務めていることが、『日本新聞年鑑』（日本電報通信社、昭和二八年一二月）で確認できる。しかし以降の『日本新聞年鑑』では名前が確認できず、また『企業の現勢』（新聞連合ニュース東京本社、昭和三六年一月）の「ラジオ東京」の欄にもその名前がなく、その後の消息は不明である。

三、『報道』の出版と展開

刊行当初は雑誌ではなく叢書として刊行された『報道』の表紙には大きく「アツツ島血風録」と記されたほか「①」とも記され、続く刊行書の表紙にも、それぞれのタイトルと通し番号が表紙に記されていた。雑誌ではないため刊行頻度も一定ではなかったが、第一輯以降同年末までおよそ月に二冊ほどのペースで一冊を世に出してから、B6判の判型は変らないまま雑誌として月二回

発行されることになった。この雑誌版として確認できたのは昭和二〇年二月一五日発行の二巻四号までの二七冊であり、合計三八冊が大東研究所編で世に出たものと思われる³⁵。なお通号二五輯にあたる昭和一九年八月一日の一巻一四号は実見できていないが、残る三七冊はすべて確認することができた。そこで、以下に刊行から終刊までの状況を素描してみたい。

叢書として刊行され始めた時、多少意識していたのは、判型からみても当時情報局が刊行していた「週報叢書」の形ではないかと思われる。週報叢書は昭和一五年一月に最初の叢書『会社経理統制令解説』が刊行され、以後昭和一八年一二月の『アジアは一つなり』まで少なくとも一四冊が刊行されているもので、雑誌形式の『週報』(昭和一一年一〇月一四日創刊)と『写真週報』(昭和一三年二月一六日創刊)とセットで、テーマごとに啓蒙的な解説を下すものであった。こうした既存の形が念頭にあったことは間違いない。

昭和一八年五月三〇日にアツツ島玉砕の大本営発表が行われたことを踏まえて送り出された第一輯³⁶の扉には「軍人勅諭」の五箇条が掲げられ、その裏には「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」などの「戦陣訓」の一部と「葉隠」の一節「武士道は死ぬことと見付けたり」が引用され、アツツ島に玉砕した兵士たちの行為を意味づける文脈を置く。大東研究所による「跋文」では「今日英霊に続かんとする吾々が銘肝すべきは、近代戦闘の実相である」として冷静な分析を求めているものの、実際に編集された内容においてそうした分析が見られるのは「今日の戦争に於いて飛行機の価値は決定的」として航空機増産の必

要性を訴えている程度で、大半は「精神の大勝利」「魂の大戦果」といった言葉でアツツ島の敗戦を糊塗し、山崎保代部隊長の公私にわたる人格者ぶりを強調するものになっている。

第二輯は「アラカンの悲劇」と題し、現在「第一次アキャブ作戦」として知られる、ビルマ西岸インド国境付近での戦闘を特集する。ビルマ奪還を目指したイギリス軍を日本軍が反撃し撃退した戦火を華々しく強調し「ビルマ民衆よ、印度国民軍よ、日本軍に従つて戦へ！ 勝利は終にわれ等のものであることを確信せよ!!」と訴える。時期的には昭和一八年一月から四月の戦闘をあえてこの時期に戦勝を強調するような形で編集することは、かつて現実の戦局の厳しさの証左ともなる。

なおこの第二輯からは冒頭に写真が入ることになり、これは以降も踏襲される。全体的な編集形式が整ってくるのが六輯以降で、ここからは「最近の戦況」として「北方戦線」「南方戦線」「大陸戦線」「欧洲戦線」の方面の戦況が大本営発表などとともにまとめられ、その後も時に応じて各地の戦況が報告される欄が継続的に設けられる。七輯からはそれに加え「戦況日誌」として大本営発表の事項を中心に戦局全体が年表形式でまとめられる。なお「本土方面」として定期的に報じられることになるのは二七輯(昭和一九年九月一日)からで、このあたりからも戦局の切迫化がうかがえる。

『報道』の大きな分岐点の一つが、週二回刊化する第一二輯以降である。この輯より巻頭に「時言」が設けられる。多くは大東研究所名義で書かれ、二三輯以降は署名のないものを除けばすべて大熊武雄名義のものである。

第六輯（昭和一九年三月一日）から、編輯人から大東研究所の名前が消え「大熊武雄」のみになる。この時、大東研究所長の城戸元亮が所長を退いており、そのことと関連があるかもしれないが詳細は不明である。同じ頃、大東研究所編として講談社から『大東亜戦争 敵俘虜の手記』が刊行されている（昭和一九年三月）。

最終号となった三八輯の「戦況日誌」は、昭和二〇年一月六日から一月二〇日までの戦況がまとめられた。

なお、昭和一九年七月に日本報道社が設立された。この出版社は陸軍報道部の要請で講談社が中心となって出来たものだが、事務所は『報道』発行所である大東研究所に置かれている。そして社員には講談社と教学社から入ったほか、大東研究所所員だった日高利市、鈴木津奈子も加わっている。日本報道社は八月一日に雑誌『征旗』を創刊しており、同じ事務所で『報道』と『征旗』が編集されていたことになる。その後『報道』発行所は二八輯（昭和一九年九月一日）から山海堂内に移転する。そして二号を出した後、三〇輯（昭和一九年一月一日）より大熊の自宅にあたる東京都世田谷区羽根木町一六八番地に再度移転して、最終号まで変更はない。

確認できた最終号は三八輯（昭和二〇年二月一日）である。口絵写真は特攻隊隊員の出撃姿で、記事もそれにあわせる形で「陸鷲体当り戦記」を特輯としている。これは昭和一九年二月三日までの特攻の戦果をまとめた三四輯の特輯「陸鷲体当り戦記」の続編になり、「この体当り戦記を読みつただ驚嘆し、讃仰してゐるに止まつてゐてはならないと思ふ。特攻隊の源流を究め、同

じ至純の境地へ己をたかめることに精進しやう（略）。彼の出来ることが持場こそ異なれわれにも出来ぬはずはないのだ」と訴える。だが、三四輯から三八輯の間にも本土空襲は連日のように繰返され、より本格的な被害をもたらしていた。「編輯後記」もまさにそれを物語るように「この後記を書いてゐる今も敵B29の編隊らしい爆音が編輯室の上に唸つてゐる」と書かれており、現在の眼から見れば絶望的な気分にもなる。

なお誌面には数多くの報道班員が動員されている。以下目立つものを題名と共に記載しておく。

井上誠「アツツ島の玉砕（詩）」（一輯、昭和一八年七月一日）、山本和夫「金塔高地」（一七輯、昭和一九年四月一日）、里村欣三「俘虜の表情」（一八輯、昭和一九年四月一日）、柴田賢次郎「若林中隊長の日記」（二三輯、昭和一九年七月一日）、火野葦平「雲南戦線」（三〇輯、昭和一九年一月一日）、秋谷豊「征途の日（詩）」（三一輯、昭和一九年一月一日）、柴田賢次郎「湖南席卷記」（三三輯、昭和一九年二月一日）、里村欣三「大陸の怒り」（三五輯、昭和二〇年一月一日）、柴田賢次郎「北東第一線を護る将兵達」（三五輯、昭和二〇年一月一日）、上田広「朝の命令——整備班記」（三五輯、昭和二〇年一月一日）、棟田博「水上勤務隊」（三五輯、昭和二〇年一月一日）、秋谷豊「征旅遠し（詩）」（三六輯、昭和二〇年一月一日）、中野実「陸軍特別攻撃隊と語る」（三六輯、昭和二〇年一月一日）。

四、戦争プロバガンダとして

『報道』が刊行されたのはアツツ島玉砕（五月二九日）を経た

昭和一八年七月一日だが、このアッツ島の敗戦は四月一八日のミッドウェー海戦での山本五十六戦死と共に、戦争の転機となった戦いといって良いだろう。これ以降、戦局は悪化の一途を辿る。もちろんそれは今日の眼から見て判断できることだが、当時そうした悪化する現実の戦局に対して『報道』はどのような編集でそれに応えたのだろうか。

昭和一九年七月九日のサイパン陥落は、七月一八日の大本営発表によって一般に知られることになった。この事実を踏まえた最初の『報道』は二六輯（昭和一九年八月一五日）である（二五輯は未見）。口絵写真には「銘記せよサイパン島！」「激憤胸奥に沸くサイパン島」「サイパン島の仇を報ぜん」とのキャプションで、在りし日のサイパンの風景、サイパン兵、増産に励む女子工員が映し出され、「編輯後記」でも「これこそ憤怒の涙であり、死を決する者の裂帛の涙であらねばならぬ」と悲壮感をあらわにする。

特集記事の「腥風サイパン島」の中でも「敵がこのサイパン戦の結果、機動部隊の基地を推進し得たことは認めなければならぬい」などといった表現で本土空襲の頻繁化の可能性を繰り返す訴える。

ただ、一方で「サイパンより本土へまでの二二八〇キロの距離は、又わが本土よりサイパン島への距離」だとして「われも亦やうやく敵の前進基地を間近にもつを得たのである」という理屈で反攻の可能性を強調することで、防戦一方の印象を和らげること余念がない。

この輯で興味深いのは、同時に置かれた森川賢司「南海の闘魂」の特集で、ラバウル戦線での日本軍の死闘を現地報道班員ならで

はの取材ぶりで克明に描いていることだ。だがサイパン陥落時点では、昭和一九年一〇月から一一月にかけての戦闘でラバウル方面の制空権制海権は完全に奪われており、ニューギニア方面での戦闘はすでに山場を超え、アメリカ軍はペリリユー、サイパン、硫黄島へと進めていた。ここでの日本軍の活躍はいつたいつの時点の話なのだろうか。文中では「〇月二十八日」とあり時期が特定できず、あたかも一九年八月現在の話のようにも読める。

「編輯後記」においては「眼前の闘ひにのみ心をうばはれ、南海の果ラバウルにいまもなほ明け暮れの空襲に抗して死闘を続けてゐる将兵あることを忘れはすまい」としてその奮闘ぶりが称揚される。そして「これら尽忠無比なる将兵が血で購ひつつあるこの一時この一刻をわれら断じて無為無能に過すまい。いまや一刻は一国の浮沈を左右するのだ」とするが、実際の敵軍はラバウルからサイパンへと迫り、ラバウルの戦いは戦局の山場を超えた過去の話のはずである。

実際の戦闘と、それに取材した報告文が執筆され、掲載される間にタイムラグがあるのは当然としても、すでに制空制海権が奪われ、戦局の中心から外れていたはずのラバウルでの死闘ぶりをサイパン陥落の分析とともに置くことで、結果的に目下の戦闘結果の重大さを矮小化するとともに全体状況を見えなくさせることに成功しているのである。

こうした編集は二七輯でも同様で、瀧田健次「ニューギニア七題」は、報道班員の体験としてニューギニア戦線での奮闘ぶりを描いたものだが、この話がいつの話なのか、時期が文中どこにも書かれていないため、「義勇隊の青年らは、また密林のなかを、

東の方をさして進んだ」と締めくくられるこの話が、あたかも二七輯発行時点のもののように読めなくもない。日本軍はまだ陣を構えてはいたものの、先のラバウル同様、ニューギニア戦線も現実の戦局の中心からは外れていた。¹²

こうして編集された『報道』誌面は、差し迫る危機を常におおりにながらも、現実の戦況と、掲載される報道班員による現地報告との時差によって、戦局の中心が見えにくいものになっている。そして報道班員による現地報告の迫真性がそのことにより拍車をかけている。すなわち目下の苦戦が続く戦局を報じながら、そこに遅れてくる現地報告のリアリティによって、目下の苦戦よりも過去の善戦が印象付けられ、戦争の全体像がつかめないようになっているのである。これが意図的なものかまでは判断できないが、戦争の巧妙なプロパガンダとして作用していることは間違いない。

*本稿の一部はJSPS科研費26770083の助成を受けている。

注

- *1 「自由出版協会発足」（『日本読書新聞』昭和二年四月二二日）
- *2 「肅清委員会開く」（『日本読書新聞』昭和二年二月二日）
- *3 「第二回肅清委員会を開催」（『出版文化』昭和二年三月二二日）によれば、新潮社、博文館、誠文堂新光社、光文社、青年館、雄鶏社、秀文閣（実業之世界社）、養徳社、日本週報社、軍事工業新聞社、文芸春秋社。
- *4 拙稿「戦時下出版メディアの諸相（一）」——日本報道社と雑誌『征旗』

——（『論樹』平成二六年二月）

- *5 『現代出版業大鑑』（現代出版業大鑑刊行会、昭和一〇年八月、復刻版『出版文化人名辞典』第三巻、日本図書センター）
- *6 『出版文化人物事典』（日外アソシエーツ、平成二五年六月）
- *7 機械化兵器協会が機械化国防協会と名称変更し、財団法人化するにあたって、それまで編集発行していた『機械化兵器』を『機械化』と改題し、昭和一五年五月号から山海堂に発行を委託している。巻号は『機械化兵器』（未見）のものを踏襲し、創刊号が三巻五号となっている。以下この三巻五号を『機械化』創刊号とみなす。
- *8 不の「内燃機関」誕生内輪話」（『内燃機関』昭和一三年九月）
- *9 「生誕二週年を仰いで編輯ざんげ」（『内燃機関』昭和一四年七月）
- *10 「科学部門を特別助成 相当量の良質紙を入手」（『出版文化』昭和一九年八月二二日）
- *11 『日本出版百年史年表』（日本出版書籍協会、昭和四三年一〇月）によれば昭和二〇年終刊。
- *12 実見できた昭和一九年二月までの二九冊のうち『機械化』編輯後記に名前があるのは登場順に以下の五名。三橋濟（陸軍少将）、来島捨六、木村民蔵（陸軍中将）、河村恭輔（陸軍中将）、小島時久（陸軍少将）、湯浅政雄（陸軍少将）。来島以外は山海堂の社員ではなく、全員陸軍出身者で国防協会の人間。
- *13 大熊武雄『推進語録』（矢貫書店、昭和一九年一月）には、初出時には無署名だったものが別名義だった文章も収められており、すべての初出を確認できていないが、『報道』の文章も多くは大熊の手によるものである。
- *14 『日本新聞年鑑』（昭和三〇年二月）
- *15 『日本新聞年鑑』（昭和三〇年二月）、『東京外国語学校一覧 自大正十三年至大正十四年』（大正一三年一月）、「大熊本社員巖父死去」（『読売新聞』昭和一二二年五月九日）では、足立区千住一丁目が自宅となつて

- いる。
- *16 『東京外国語学校一覽 自大正十三年至大正十四年』(大正一三年一月)
- *17 『東京外国語学校一覽』(昭和二年一月)
- *18 石橋恒喜『昭和の反乱 上』(高木書房、昭和五四年二月)
- *19 『新聞人名録』(新聞之新聞社、昭和四年二月、第二版 附録の各社社員名簿の東京日日新聞社政治部の末尾にその名前が登場している。
- *20 壁谷祐之「古き良き記者魂の記——外務省霞クラブ」(『月刊官界』昭和五四年三月)
- *21 『日本新聞年鑑』(昭和六年二月)
- *22 『大阪毎日新聞五十年』(大阪毎日新聞社、昭和七年三月)
- *23 津田騰三「書かれざる東日事件」(『人物往来』昭和三〇年二月)
- *24 『日本新聞年鑑』(昭和八年二月) 収録「昭和八年二月八日現在」の東京日日新聞社社員名簿には名前がない。また翌年の『日本新聞年鑑』(昭和九年二月、第十三版)でも東京日日新聞社、読売新聞の社員名簿にも名前がないが、翌年の『日本新聞年鑑』(昭和一〇年二月、第十四版)では、「読売新聞社 政治部」のところに名前があり、「陸軍省記者倶楽部」(十年十二月現在)にも読売新聞社社員として名前がある。
- *25 『読売新聞100年史 別冊資料・年表』(昭和五一年一月)
- *26 大久保弘一「赤色支那」(高山書院、昭和一三年四月)
- *27 『高木惣吉 日記と情報上』(みすず書房、平成二二年七月)
- *28 城戸元亮らの陸軍とのつながりについて、講談社の荳原宏一が『昭和動乱期を語る 一流雑誌記者の証言』(経済往来社、昭和五七年一〇月)の座談会で語った回想はまた別の側面を明らかにすると思われるのでその要点を紹介しておく。彼によれば、情報部長に佐藤賢了が就任した(昭和一三年七月)時に、佐藤が一大情報局設置案をたてその実現に奔走し、局長に城戸元亮と彼の内諾をとり、人選まで行っていたところ、この情報局構想が潰れてしまう。そこで城戸が連れてきた人達を陸軍囑託とい

- う形で報道部入りをさせたということである。推測するにこの時に出来たのが「大東研究所」であろう。そして座談会中「城戸さんの一味といつても彼の直系というのは大熊だけだね」との発言があり、大熊武雄の存在もこうした中で理解できる。荳原宏一「私の大衆文壇史」(青蛙房、昭和四七年一月)もほぼこれと同様のことを記述している。里見脩『新聞統合』(勁草書房、平成二三年二月)もこれら資料を基にしているが、これらの資料以外の情報も記述している。
- *29 大熊武雄「大陸縦走記」(『現代』昭和一六年九月)
- *30 関西大学図書館「日本文学報国会 大日本言論報国会 設立関係書類 下巻」(平成二二年三月、関西大学出版部)
- *31 長田政次郎「無条件降伏一日前の記者クラブ」(『文芸春秋』昭和三五年九月)
- *32 大熊武雄「時局の眺め方いろいろ」(『繊維月報』昭和二五年三月)および『日本新聞年鑑』(昭和三〇年二月)。
- *33 『日本新聞年鑑』(日本電報通信社、昭和三〇年二月)
- *34 『日本新聞年鑑』(日本電報通信社、昭和二八年二月)、大熊武雄「民間放送」(『東商』昭和二九年一月)、『日本新聞年鑑』(日本電報通信社、昭和三〇年二月)。
- *35 新聞広告でも三八輯の広告が『朝日新聞』(昭和二〇年三月七日)、『読売新聞』(昭和二〇年三月二〇日)に出ているのが最後である。ここでは「三月中旬発売」とあり、奥付の発行月日(二月一五日)と相当ずれがある。
- *36 第一輯には八月一日付けの再版が出ている。国立国会図書館所蔵のものとは再版である。
- *37 『城戸元亮翁追悼録』(日本談義社、昭和四二年一月)。その後、城戸は旺文社の赤尾好夫の息がかかった大東亜出版株式会社の社長となったという。
- *38 注四参照。

*39 「執筆者紹介」（『文芸世紀』昭和一九年二月）
現在の地番でいえば世田谷区羽根木一丁目七番、八番、一六番あたりになる。

*41 文中一か所「わが進攻部隊がスタンレー戦線から他へ転進したとき」の話だということが書かれている。このことから推し量れば昭和一七年九月以降だと推測され、だとすれば昭和一九年九月との時差はより大きいものになる。

*42 こうした誌面において注目に値するのが火野葦平「雲南戦線」（三〇輯、昭和一九年一〇月一日）である。ここでは「私はこの文章を平静な気持ちで書くことができないかも知れない」と書き始められ、この文章で書いた騰越部隊、拉孟部隊が今はすでに玉碎しているということを明示し、敗北を嘯みしめながら書く「私」を設定している。

別表一 『報道』(山海堂) 書誌

表紙 記載 タイトル	表紙記載	通号	巻号	年	月	日	定価	部数	編輯人	編輯人住所	発行人	発行所	発行所住所	印刷人	印刷所	印刷所住所	頁	国会	校章
報道	アッツ島血風録	1	1943	7	1	25銭	5万部		[記載なし] 東京赤坂区溜池町31 山王ビル			山海堂 出版部			山海堂 出版部	東京都神田区神保町 2丁目10番地	60	○再版	
	アラクンの悲劇—印緬国境減滅戦	2	1943	7	21		6万部								山海堂 印刷所		83		
	ガダルカナル以後	3	1943	8	11		8万部										90	○	
	敵情展望	4	1943	8	30		7万部										92		
報道 叢書	世界戦線—戦線図から見た最近の戦局	5	1943	9	20		6万部										93	○	○
	北辺近情—キヌガ転進前後	6	1943	10	1		7万部										95		○
	室はと傳孝と上原—伊太利攻変を繰る米英の魔手	7	1943	10	15		7万部		大東研究所 代 表 者 大熊武雄	東京赤坂区溜池町31番 地山王ビル	山海堂 出版部					東京都牛込区市谷加 賀町1丁目12番地	95		
	世界補給戦	8	1943	11	3		7万部										95	○	
	国境決戦	9	1943	11	18		7万部										95		
	ニューギニア・ラエ戦線 南海艦隊記—森川陸軍報道班員現地報告	10	1943	11	28		10万部										95		○
	敵空挺の形相	11	1943	12	21		7万部										95	○	
	特輯 独ソ冬季戦—最近の戦況	12	1	1944	1	15					来島捨六					東京都神田 区神保町2 丁目10番地	96	○	
	特輯 島嶼争奪戦—米・英々の対日戦法	13	1	1944	2	1	30銭										100	○	
	特輯 印度は揺く／ラバウル便り	14	1	1944	2	15											100	○	
報道	特輯 西南太平洋決空決戦記	15	1	1944	3	1											100		
	特輯 兵団長機運録未記／ニューリブリン島縦断記	16	1	1944	3	15			大熊武雄 大東研究所							東京都牛込区市谷加 賀町1-12	84		
	特輯 大陸的空を衝く／金塔高地	17	1	1944	4	1											84	○	
	特輯 敵謀略機関減滅行	18	1	1944	4	15											84		
	特輯 敵巨艦撃滅の真相／コンソリ撃滅工尾崎中佐の陣中日誌	19	1	1944	5	1											84		
	特輯 壊滅前夜の英印軍	20	1	1944	5	15											84		
	特輯 ラバウル救援記	21	1	1944	6	1			大熊武雄								80	○	
	特輯 反叛師団の内訌／印度前線母兵の闘魂	22	1	1944	6	15											84	○	
	特輯 若林中隊長の日記／印刷の空を羽撃く	23	1	1944	7	1											84		○
	特輯 急転する支那大陸戦線／風雲の第二戦線	24	1	13	1944	7	15										84		
報道		25	1	14	1944	8	1										84		
	特輯 蘭風サイパン島／南海の闘魂	26	1	15	1944	8	15										84		
	特輯 空襲戦術／ニューギニアア七重	27	1	16	1944	9	1										84	○	
	特輯 興亡闘す欧州決戦／アメリカの航空作戦	28	1	17	1944	9	15										84		
	特輯 ソ連は折く／敵ふ／米軍空襲不時警訓	29	1	18	1944	10	1										84		
	特輯 敵の侵攻作戦／雲霧戦線	30	1	19	1944	10	15										86		○
	特輯 壮烈挺身隊出動／B29が支那に現るまで	31	1	20	1944	11	1										68		○
	特輯 台湾・比島決戦記／航空機生産の現状	32	1	21	1944	11	15	30銭									68	○	
	特輯 大陸分断作戦成る／湖南高巻記	33	1	22	1944	12	1										68		○
	特輯 陸軍体当り戦記／雲上備撃	34	1	23	1944	12	15										68		
	特輯 決戦の支柱／一兵士の日記	35	2	1	1945	1	1										68		○
	特輯 レイテ血闘記／陸軍特別攻撃隊と語る	36	2	1	1945	1	15										68		○
	特輯 ルソン島激戦戦／焼夷弾をふるに足らず	37	2	3	1945	2	1										68		○
	特輯 陸軍体当り戦記(続)／陸軍サイパン強襲記	38	2	4	1945	2	15										68		○

* 各欄の末尾には最も所載が多い国会図書館と、岐阜県立図書館の所蔵状況について記した。
* 現在通用の字体に直した。住所表記は通数字を算用数字に直した以外は原文のままとした。
* 作成にあたっては通号31、33、37は岐阜県立図書館所蔵本を使用し、それ以外は複製本を用いた。

別表二 大熊武雄著作目録

著者名表記	題 単行本の場合は「」	年	月	日	誌紙名(出版社名)	肩書	備考
大熊武雄	支那の国民訓練	1937	7	26	水上茂編「日支遂に敵か」(第一出版社)	読売新聞社 (前北京支局長)	
大熊武雄	議会記者ばかりの解散裏ばなし座談会	1937	4		実業之日本	読売新聞社	
大熊武雄	税制改革と新所得税	1939	9		経済知識		
大熊武雄	第二次欧州大戦走馬燈	1939	10		外交時報	陸軍省嘱託	
大熊武雄	戦争と宣伝戦	1940	1		外交時報	陸軍省嘱託	
大熊武雄	米国の日本侵略未遂	1940	6		国民防空		
陸軍省情報部	言論の重要性と各種宣伝機関の現状(新聞、雑誌、映画、放送)	1940	6	26			「当部大熊嘱託員の調査」によるものとの注記がある。『情報局関係資料』第2巻(柏書房)に収録
大熊嘱託	座談会 独対英仏の座談会近代戦と防空	1940	7		国民防空	陸軍省情報部	
大熊武雄	国防国家建設の世界的趨勢	1940	10		国民防空	陸軍省情報部	「推進語録」収録時は「国防国家への推進」
	世界再建と国防国家	1940	11	27	鈴木庫三「世界再建と国防国家」(朝日新聞社)		
大熊嘱託	新聞統制私案断片	1940	12	5			「情報局関係資料」第2巻(柏書房)に収録
大熊武雄	最新型の言論人	1941	4		公論		「推進語録」収録時は「典型的言論人」
大熊武雄	日ソ中立条約成立の意義	1941	6		新若人		
大熊武雄	大陸縦走記	1941	9		現代		「推進語録」に収録
大熊武雄	大陸の女性は何いてある	1941	9		婦人画報		
大熊武雄	国防国家建設の急務	1941	9	10	教材社編輯部「闘争の思索」(教材社)		
大熊武雄	戦争と民族	1942	1		新若人		「推進語録」に収録
大熊武雄	支那事変の現状	1942	7		ユーモアクラブ		「推進語録」に収録
大熊武雄	崩壊前夜の蔣政権	1942	7		新若人		「推進語録」収録時は「苦悶の蔣政権」
大熊武雄	戦争と思想	1942	8		文芸世紀		「推進語録」に収録
大熊武雄	満州事変の世界に響けるもの	1942	9		新若人		
大熊武雄	躍進満洲国	1942	9		婦人画報		
大熊武雄	敵国民の生活断面	1942	10		陸軍匪躬会会報	前陸軍省報道部 嘱託	「陸軍匪躬会会報総目次」『陸軍匪躬会会報』(1944・10)による
大熊武雄	交戦各国戦時生活の現実	1942	12		新若人		
大熊武雄	敵国民の生活断面	1942	12		ユーモアクラブ		
大熊武雄	新生昭南島 通信・東亜園	1943	2		婦人画報		撮影・高田重二郎
大熊武雄	太平洋戦局の今後	1943	4		新若人		
大熊武雄	「まとおはなし ざうとへいたいさん」	1943	7	15	新生閣	陸軍省嘱託 陸軍省報道部	著者略歴あり。絵黒崎義介 序 陸軍省報道部陸軍中佐 佐々木克己
大東研究所	(無題)	1943	7	21	報道		「推進語録」収録時は「第一次ビルマ作戦」
大東研究所	(無題)	1943	8	11	報道		「推進語録」収録時は「敵の戦略を衝く」
大東研究所	(無題)	1943	8	30	報道		「推進語録」収録時は「唯物的敵軍を摧け」
大東研究所	(無題)	1943	9	20	報道		「推進語録」収録時は「戦争を身につけよ」
大東研究所	序	1943	10	15	報道		「推進語録」収録時は「バドリオ政権を唾ふ」
大東研究所	(無題)	1943	11	3	報道		「推進語録」収録時は「補給戦に勝て」
大東研究所	提言	1943	11	18	報道		「推進語録」収録時は「敵の謀略を切断せよ」
大東研究所	提言	1943	11	28	報道		「推進語録」収録時は「前線將兵を拝む」
大熊武雄	大東亜戦局の動向	1943	12		新若人		
大熊武雄編	「勝ち抜く力」	1943	12	25	新生閣	陸軍省嘱託	大本営陸軍報道部監修 著者略歴あり
大東研究所	時言	1944	1	15	報道		「推進語録」収録時は「独軍の底力を讀ふ」
大熊武雄	世界戦局展望	1944	2		文芸世紀		
大東研究所	時言	1944	2	1	報道		「推進語録」収録時は「壮年男女も奮起せよ」
大東研究所	時言	1944	2	15	報道		「推進語録」収録時は「印度は揺ぐ」で末尾改稿
堀田吉明・大熊武雄	「密林縦断血戦記」	1944	3	10	新生閣		著者略歴あり
(無署名)	時言	1944	3	15	報道		「推進語録」収録時は「皇国隆替の歧路」
大東研究所	時言	1944	4	1	報道		「推進語録」収録時は「制空こそ制勝の因」
大熊	時言	1944	7	1	報道		
大熊	時言	1944	7	15	報道		
大熊武雄	皇軍は征く 印緬国境戦	1944	8		征旗		
大熊武雄	大東亜戦争なかりせば	1944	8		明朗		
大熊	時言	1944	8	15	報道		
大熊武雄	東亜戦局の動向	1944	9		村と農政	陸軍省報道部員	末尾に(九月二日記)
大熊	時言	1944	9	1	報道		
大熊	時言	1944	9	15	報道		
大熊	時言	1944	10	1	報道		
大熊	時言	1944	10	15	報道		
大熊武雄	「新兵器」	1944	10	30	山海堂		
大熊武雄	滅敵一本槍の化学工業へ	1944	11		化学工業協会誌	陸軍報道部	末尾に(19.11.6)
大熊	時言	1944	11	1	報道		
大熊	時言	1944	11	15	報道		
大熊武雄	「推進語録」	1944	11	25	矢貫書店		これまでの著述をまとめたもの
大熊	時言	1944	12	1	報道		
大熊	時言	1944	12	15	報道		
大熊武雄	基地	1945	1		征旗		
大熊	時言	1945	1	1	報道		
大熊	時言	1945	1	15	報道		
大熊	時言	1945	2	15	報道		
大熊武雄	時局の眺め方いろいろ	1950	3		繊維月報	米澤織物工業株式会社総務部長 元毎日新聞政治記者	
大熊武雄	民間放送	1954	1		東商	ラジオ東京総務部長	

戦時下出版メディアの諸相（二）

Aspects of Printing Media During Wartime in Japan (2)

SANKAIDO, “HOUDOU” (Magazine), DAITO KENKYUJYO

KAKENO, Takeshi

キーワード：山海堂、大東研究所、戦時下メディア

Key words : SANKAIDO, DAITO KENKYUJYO, printing media during wartime